

司馬遼太郎「城塞」〈抜粋〉

(文中の太字と〈〉内は引用者による。また、・・・・・・は省略部分。)

〈冬の陣前〉

▲唐突だが、生駒山をのぼる坂はいくつかあり、そのうち古事記にもあらわれるもっともふるい坂が、**孔舎衛坂**くさかざかである。いまはこのあたりの赤上が切りひらかれて高速道路化され、阪奈有料道路(※)になっている。

(※) 引用者：阪奈道路は現在は無料道路となっている。

道は生駒山を蛇行してのぼり、やがて大和へこえる有料の峠になってゆくのだが、のぼりつつ途中でふりかえれば、いわゆる**摂河泉せつかせん**(**摂津・河内・和泉の三国——大阪府**)の**大眺望**が眼下にひらける。

筆者わたしは、この展望が日本のどこよりもすきで、大和へゆくたびに、大阪をふりかえる。ときに大阪湾が光り、神戸までが見はるかせそうなこともある。

(※) 引用者：司馬遼太郎さんが日本のどこよりも好きだった摂河泉の大眺望↓

<http://01b.up.n.seesaa.net/01b/image/03E69182E6B2B3E6B389E381AEE5A4A7E79CBAE69C9BEFBC99EFBC95.jpg?d=a3>

上記の写真は、阪奈道路の地図(<http://v1.cocolog-nifty.com/blog/files/14.jpg>)に「摂河泉の眺望」と印字

したところ(その写真⇒<http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/files/14.JPG>)で撮影

話に移るが、徳川家康にも、その経験があったにちがいない。その生涯のうち何度か、かれは大和から大坂に入るべく生駒山を越えた。かれも大坂の野を見はるかしたであろう。一望の田園は膏肉あぶらみのようにゆたかであり、野は茅渟ちぬノ海(大阪湾)をかこんで瀬戸内海に通じ、淀川はかれの当時百万人を養うに足るといわれ、さらには秀吉が作ったその市街は、天下の富をあつめている。

城がある。

西欧の城塞をはるかにしのぐ、と宣教師たちによって讃嘆されたその巨城は、生駒の山腹から十分に遠望することができる。家康はすでに天下人になった時期、自然の感情としてこの野と海と城市を、手づかみしたくなるほどにほしかつたにちがいない。

「大坂は、およそ日本一の境地なり」

というのは信長記しんちょうぎの文章であったが、その信長は早くからここに海内かみだい(引用者：天下のこと)の中心をおこうとし、しかしながら石山本願寺攻めにてこずり、計画の成らぬままに死んだ。秀吉がその構想を継いだ。かれは大坂を大明国までふくめた東アジアの中心にしようとし、十万人を収容できる巨城をつくったが、しかしその秀吉も、いまは亡い。

家康だけが、生きている。

だけでなく、秀吉の遺児秀頼もいる。ただ秀頼は、関ヶ原の合戦のあと、家康によって天下をとりあげられ、この見はるかす範囲の土地、つまり摂河泉のうちでわずか六十五万七千四百石という奥州の伊達家程度の大名にまでおとされてしまった。

▲いったい、**伊賀の国**というのは古来「隠れ国」といわれるほどに奇妙な土地である。畿内(近畿地方)でありながらよほどの田舎の印象があり、ふと伊賀といえばひとびとは京・大坂から遠隔の地のように錯覚する。しかし実際には京のある山城国とは山中で国を接し、大坂に対しては**木津川の溪流に軍船をうかべさえすればそのまま山々の間を縫って大坂の天満に直行する**ことができ、城攻めの大军をまるで魔法のようにみじかい時間で輸送することができるのである。

▲このころの河内国というのは大和川という河床の高い天井川が慢性的に氾濫するためひどい低湿地で、沼とも池ともつかぬものが多く、ところどころ洲か島のようにして乾きあがった土地があり、家々はそこにある。徳川中期にこの大和川の河流を変える工事がおこなわれて堺へ流されたため、河内の土は一円に乾き、一国まるまる美田

になった。が、この勘兵衛が歩いているころの河内は、面積のわりにはさほど米がとれない。秀頼領というのは摂津、河内、和泉（いまの大阪府）約七十万石であるが、この時期あたりになって河内の泥沼をうずめ新田を開発し、豊臣家の収入をふやそうという政策がわずかにとられた。ついでながら、筆者が住んでいるあたりの地主たちは、このころ豊臣家の奨励で入植してきた開拓者の子孫らしい。遠くから土を運んできてそれを泥沼に投げ、おそらく際限もないほどに投じてようやく大地をつくるという労働をかれらはした。作った地面は作ったぶんだけその者の地所になるのである。若江村の土は、古来乾いている。ここは奈良朝以前からの大聚落があるし、戦国期には小さな城もあったが、その城は勘兵衛のころにはない。村のなかを街道がとおっている。……「沖」というのは広い沼沢地のことをいう。この河内の大沼沢地をこの当時深野ふこうの池ともいい、徳川期の大和川の河流のつけかえのちこのあたりが乾ひあがり、池もなくなったが、このころは南北二里、東西一里というまるで湖のようであった。その「沖」の中央に島があり、三箇村といった。三箇村七十戸はみな漁業で、水田はもっていない。

▲家康は、奈良で泊った。かれが奈良にいることを、いち早く知ったのは大坂城の真田幸村であった。幸村は家康の動静について逐一知ることができるだけの諜報網を家康の西上コース一帯に張りめぐらしており、大坂城内でも、——駿府翁（家康）のことなら左衛門佐どのにきけ。と、評判になっているほどのものであった。……この時期、幸村は徳川氏と戦う方法を考えぬいたあげく、（家康を殺す外に、武略なし）という結論に達していた。家康を殺すには、家康の布陣が整わぬすきをねらい、その手薄の本営を急襲し覆滅する以外にないということであった。このために幸村は諜報網を精密に張りめぐらして家康を待ったのである。家康は、その網にかかってきた。「奈良では、中ノ坊を宿館としています。その手勢は、わずかしかない。今夜、即刻にでも大坂から兵を發し、奈良を襲うにしかず」と、幸村はいった。かれは、「大坂から奈良までわずか七里」と、距離を言い、その経路もいった。強襲部隊を二道にわかれて進ませ、**一隊は暗峠（生駒山）を越えて奈良へ達せしめ、他の一隊は中垣内越えをもって山城の木津を経て奈良に達せしめる**……と、大野修理に説いた。修理は、内心おどろいている。（そのような冒険が、はたして可能か）と、むしろ恐怖のほうにさきに立った。修理の戦略思想は、あくまでもこの難攻不落の巨城を頼りに防戦するということにあり、進襲して戦いの運を一挙にひらくという考え方を毛ほども持っていなかった。……大野修理が変則ながら事実上の総帥に似たかたちをとっていた。幸村は、さらに説いた。が、修理は乗ってこず、幸村もついに、（しよせんは、われわれは客将にすぎない）と、あきらめざるを得なかった。

<冬の陣>

▲茶臼山というのは、地形の変化にとぼしい大坂にあっては、**唯一の山**といっている。大坂城の南、四天王寺のまわりの平坦地に瘤のように隆起し、しかもまわりに濠がめぐらされている。その形状からして古代豪族の墳墓らしいが、何者の古墳ともわからぬままに、土地の者も荒陵とよんでいた。家康はこの山を自分の戦闘指揮所にするつもりであった。北方の大坂城から二キロしか離れていないのが難だが、眺望のきくのが利点であった。……茶臼山の山頂は昨夜からのわか普請で、すでに陣小屋ができていた。家康が備前鍛冶に命じて作らせた鉄製の楯が、小屋を二重にとりまいている。大坂方がいかに銃砲弾を撃ちこんでも、十分にはねかえずであろう。家康と秀忠は山頂に立ち、あたりを眺望した。すぐそばに四天王寺の堂塔があり、その北方二キロむこうに大坂城の天守閣がそびえている。足もとの野や谷に、人馬が充満していた。藤堂と井伊の兵であった。

▲大坂城の東に、生駒連峰がみえる。それを越えれば大和の国原くにばらがひろがっているはずであったが、千姫はみたことがない。「大和には、仏さまがたくさんいらっしやいます、長谷の観音さま、西ノ京の月光がっこうさま、当麻の吉祥天女さま。……」と、童女のころ、侍女が「外界」の物語をしてくれたときに、そのように教えてくれた。その言葉の一つ一つが童女の想像力のなかで核になり、風景を結び、その風景がうごき、大人になってしまったいまも、「大和にはたくさんのお仏さまが、ゆらゆらと野道を歩いていらっしやる」と思い、そういう頭の中の風景がどうもわれながら滑稽とおもうのだが、大和どころか、現実の外界を見たことがない彼女にとって、うち消すことが

できない風景であった。黄金の仏もいらっしゃるであろう。その足を運ぶたびに裳もすそが風にひるがえるに相違なく、また唇の丹の色の鮮やかな仏たちも、国原をあるきつつ、他の仏たちと手をつないだり、笛を吹いたり、舞ったりしているにちがいない。……彼女自身、御殿から一步もそとへ出ることを禁じられたのである。(もはや、生駒の山も見ることができない) ということが、彼女を悲しませた。

▲城東は、低湿地である。……大坂城の城東は、「大沼也」と、秀吉築城のころからいわれてきたように、それが天然の要害をなし、水田多く、兵馬の進退がしにくい。このあたりに三筋に川が流れて、城をまもっている。もっとも城に近いのが猫間ねま川であり、この長堤の上に柵がうちならべられ、大坂方の前線陣地があった。ついで平野川、もっとも外側に大和川(引用者：こんにちの大和川ではない)がながれている。大坂方はこの城東防衛のためあらかじめこの三筋の堤をとところどころ断ち切って、水を水田に流しこんでいた。……大坂城の東から東北にひろがる広大な湿地帯でおこったのが、いわゆる冬ノ陣最大の戦闘とされる「鳴野・蒲生・今福」の戦いであった。この村々をふくむ一望の風景は、「湖水のごとく罷成まかりなる」と「大坂御陣覚書」にあるように、重い甲冑かっちゅうを着てその湖水をわたるなどはとてもできないことであった。そのなかで三つの川の堤防だけがながながととかび、その堤防には大坂方が長城のように柵を植えならべて、そのなかに足軽たちがつねに狙撃姿勢をとっている。最初、佐竹・上杉の両軍は、城からもっとも遠い川である大和川(こんにちの大和川ではない)の堤防のそとに駐軍せざるをえなかった。

▲現今こんにちこの木津川尻砦のあったあたりには南北に御堂筋が走り、東西の三津寺筋と交叉している。このころ砦の前面は、海とも川ともつかぬ木津川の河口の浜であった。

▲この間、真田幸村は、常時城南にいた。城南は、この巨城を秀吉が築城した早々から最大の弱点とされ、秀吉は終生それを苦しめていた。大坂城はいわゆる上町台地の北端にあり、西は海をひかえ、北と東には川をめぐらしていわば天嶮にまもられている。ただ南に対してだけは、台地が平らかにつづいて四天王寺にまで至っており、人馬の往来は自由であった。家康が、この城南に攻撃の主点をおき、大軍を集結させ、みずからの指揮所も城南の四天王寺付近の茶臼山に置いたのは、当然の着眼であった。「南がよわい」と、真田幸村は入城早々、大野修理に警告しその後軍議がひらかれるたびにいったのも、このことであった。

ついでながら、大坂城の規模はこんにちの大阪城よりもはるかに大きい。たとえばこの城の西方についていうと、三ノ丸ははるかに横堀(南北の運河・船場の東限をなす)をもって西限としているのである。横堀にかかった橋は、ことごとく城の橋であった。その横堀の橋を北から南にむかってあげてゆくと、今橋、高麗橋、平野橋、思案橋、本町橋、農人橋、久宝寺橋、安堂寺橋、鰻谷橋と、九つある<引用者注>。これらの橋の列から東のほう追手門にいたるまでの広大な地域のことごとくが三ノ丸であった。さらにこの三ノ丸の南限は、南のほう清水谷までおよんでいる。現今の地理でいえば、環状線玉造駅が三ノ丸の東南角に相当し、そこに黒門と称せられる城門がある。玉造駅から西へ、松屋町筋(南北の道路)に交叉するまでの線が、大坂城三ノ丸の南限線であった。最近までここに市電が走っていたが、いまはレールがはずされ、ただの道路になっている。この道路は、両側の土地よりやや低く、場所によって谷といえるほどに低い。この道路が、豊臣期の大坂城三ノ丸の南限の堀であった。秀吉が大坂城を築くとき、この城南の地形に天嶮がないことを心配し、ここに堀を掘ったのである。それでもなお秀吉は終生、この城は南がよわい、ということに気にしつづけた。そのことはすでに触れた。

<引用者注>大坂冬の陣布陣図 (https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/6/62/Osaka_no_eki_winter.png) ご参照

この図は、下記URLのWikipediaより

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E5%9D%82%E3%81%AF%E9%99%A3%E5.A4.A7.E5.9D.82.E5.86.AC.E3.81.AE.E9.99.A3>

真田幸村が、「それがしが、南を守りましょう」と買って出たのは、この城の最大の弱点を、おのれ一手で塞ぎ止めてみせようということであった。幸村には一途にそのようなところがあった。豊臣家の人柱になってみようとい

う覚悟が、自負心のつよさに裏打ちされていた。幸村は、このため三ノ丸の南限の堀のそとへ自分を置こうとした。つまり**敵へ突き出した場所に小城塞をつくろうとした。「真田丸」といわれる構造物が、それである。**

▲戦いの重点が、城南に移った。城南、つまり上町台である。現今の地図でいえばNHK大阪中央放送局の場所は三ノ丸郭内の南地域にあたり、さらにその南の警察会館や、教育会館、大阪赤十字病院も同様であり、それに森ノ宮界限から玉造界限も三ノ丸南地域であり、その三ノ丸の最南限が、清水谷高校の門前東西道路である。この道路が、三ノ丸の南限をまもる長大な濠であった。このあたりまで、大坂の城兵がびっしり防戦態勢をとっている。

<夏の陣>

▲大和から河内へ出る峠は十幾つあるが、たとえ道がなくとも山一重が境であり、岩をつかみ藤蔓にすがって登っても尾根にさえ出ればそのむこうが河内平野である。……河内へ越える十幾つの道のなかで山路でないのは亀ヶ瀬越えだけであり、百姓たちもふっうその道を往来する。ところが、土地の伝説では、はるかなむかし、物部守屋ノ乱のころからこの亀ヶ瀬を越えて河内へ出た軍勢で勝ったためしがなく、この切所の名称を別に「首落し」と名づけられている。

▲いまの大阪府の一部を構成する河内国は、東を生駒・葛城山系で区切られて大和に接し、ほとんどが平坦な田園地帯であり、この夏ノ陣当時は沼沢が多く、一見、水郷の観があった。大坂方としてはいちはやく生駒・葛城山系の嶮をおさえられればよいが、遅れれば戦場はこの河内平野になるであろう。後藤又兵衛の隊が、「国分の嶮をおさえる」というのを目標に、夜行軍をつづけていたとき、ほかに二個の縦隊も、生駒・葛城山系にむかって東進しつつあった。

木村重成隊 六千 大坂城から若江村経由の街道・いまの近鉄奈良線沿線

長曾我部盛親隊 五千三百 大坂城から久宝寺・八尾経由の街道・いまの近鉄大阪線沿線

右の二個縦隊に、後藤又兵衛隊二千八百(いまの近鉄阿倍野線沿線)が加わって三個縦隊一万四千ばかりの兵が、大坂方が出した野戦用の決戦部隊である。

これにひきかえて家康方の兵力は三十万、そのすべてが野戦兵力であり、そのうちこの大坂方の三個縦隊にむかう兵力だけでも十万はくだらず、それをさらにしぼって直接に衝突する兵力だけでも五万はあるであろう。大坂方の悲痛さは、その兵力の寡少さにあるだけではなかった。河内平野は草遠く水霞む平坦な地形であるとはいえ、この三個の縦隊が東進する三つの街道を南北に連絡する道路がなく、途中、沼や深田、池などが点在してたがいに連繫できず、たがいに孤立しているというところにこの作戦の致命的欠陥があった。もっとも兵力がこうも懸絶してしまっていては、「作戦」といえるようなものが、樹たてられる状況ではなかった。冬ノ陣のときは日本最大の城郭があったればこそ籠城戦術の工夫もあったのだが、いまとなっては野外で決戦するしかなく、しかもその戦場の地形は身をかくす場所もないほどに広闊こうかって、策のほどこしようもなかった。それでもなおこの寡少の決戦部隊が絶望的な戦いにむかってすすみ、しかも士気が三個縦隊ともたぎるように旺盛であったというのは、中世から近世にかけての諸合戦のなかで異様なばかりの例外といいいい。本来なら、未然に潰乱かいらんまたは落去する。が、そういう通例の現象がみられないばかりか、かれら寡少の兵力が、すすんで敵を撃とうとして積極的に踏み出しているのである。

……京における東山が、大坂の場合、生駒山である。東方の屏風となっている。ただ京における東山とはちがい、大坂の場合市街地から生駒山までのあいだに河内平野が横たわっている。河内は草遠く、地平らで、池や沼が多い。その生駒・葛城連峰にむかって、三つの縦隊が出発したことは何度かのべてきた。南は後藤又兵衛隊、中央は長曾我部盛親隊、北は木村重成隊で、**ことごとく東の生駒・葛城連峰をめざして直進した。**その三個縦隊が、たがいに戦術的連携をたもつにはあまりにもたがいの間隔がはなれすぎていて、結局は各個にたたかうはめになったことも、すでにのべた。しかしながらそれらは彼等の戦術上の誤りではなく、兵力においてかけ離れて少数であ

る大坂軍にとって、座して自滅を待つよりも、戦ってみずからを砕くしかなかった。むろん戦術に絶望的戦術というものはありえず、かれらにすれば、「家康の本営を襲い、家康ひとり刺すべし」というのが、唯一の目的であった。刺せるかどうかの可能性は千に一つもなかったが、しかしたとえ万に一つであっても可能性は可能性であり、その針の尖ほどに小さな可能性に大きな希望を托しつつ、しかしながら、又兵衛が、「みずからの最後を飾らん」と、攻撃前に将士に演説したように、この朝の霧の中を分進してゆくこの三個縦隊の各将は、ほぼ似たような心境にあった。この三個縦隊の戦闘の痛烈さというものは、ことごとく緒戦から第二戦、第三戦と戦闘には勝ちつつも、しかしながら後続する予備隊をもたず、一方、人の海のようにしてやってくる徳川軍の人数の壁のあつさの前に自滅するようにしてやぶれたことであり、この戦いぶりが、後世までかれらをして国民的ロマンの主人公たらしめた。ともあれ、この三個縦隊がほぼ前後して河内平野の沼沢を血で染めつつ潰滅したのである。

▲家康はこの河内平野における激戦がおわったころ、生駒山麓の台上にある枚岡という土地に本営を移した。ここに古社（いま枚岡神社）があり、その社家屋敷から見おろすと、**眼下に河内平野が一望に見おろすことができ、そのむこうに摂津平野がつづき、大坂城の天守閣が、夕靄ゆっもやのなかに影のようにかすんでいる**。……城下決戦をあすにひかえたこの摂河泉（大阪府）の夜景というものは、三十万の攻囲軍が焚くカガリ火によって凄絶ないろどりをみせた。家康がねむっている枚岡台地からこの三州の野を見おろすと、その炎のむれが作り出している夜景を一望でおさめることができる。先鋒の交代によって、日没前後にさかんに軍隊移動がおこなわれ、日没後も松明をかかげた部隊々々があちこちでうごき、深夜にそのうごきが静まって、包囲態勢が完了した。

▲河内の若江村をへて摂津国の大坂にむかう場合、**高井田（布施）という在所をすぎると、そこからむこうが摂津国になる**。摂津国東成郡。地形でいえば、河内国は低湿地であり、水田の泥は深く、いたるところに沼沢があり、沼には無数の泥鰌が棲んでいる。それが**摂津国に入ると、心持のぼり坂になる。その坂がにわかにはわしくなるのが前記上町台**だが、その上町台にさしかかる東の裾野のあたりに岡山という笹のはえ茂った小丘がある<引用者注>。江戸期の地名でいえば摂津国東成郡鶴橋村のうちになるが、その鶴橋村に岡村という大字がある。その岡村のなかの丘がこの岡山で、この丘の上に立てば、やや展望がきき、上町台にむかってとりかかってゆく軍勢の指揮が多少は便利である。……岡山を指揮所とするこの攻撃路は、いわば助攻であった。こんにちの地理的説明でいえば、鶴橋から味原（当時、大きな池があった）をへて上六（正しくは上本町六丁目。近鉄上六百貨店の位置）へのぼってゆくコースで、この坂をのけると、右の方角に大坂城がみえ、左手の方角に四天王寺がみえる。ところで大坂方の野外兵力は四天王寺付近に布陣しているから、この秀忠の攻撃路というのは、その大坂方の四天王寺付近の野外陣地と大坂城との中央を分断してしまうという戦略価値をもっている。が、戦闘からいえば主決戦をやるわけではない。なるほど大坂方のこの方面の備えとして大野修理などの諸部隊が味原池のあたりまで出張っているが、兵力としては一万もいない。この程度の敵に対し、秀忠は十万以上の兵力で攻めようというのである。要するに、一人前の大人のやるしごとではなかった。

<引用者注>大坂夏の陣布陣図 (https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/9/95/Osaka_no_eki_summer.png) ご参照

この図は、下記URLのWikipediaより

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E5%9D%82%E3%81%AE%E9%99%A3%E5%A4%A7.E5.9D.82.E5.A4.8F.E3.81.AE.E9.99.A3>

▲すでに、幾度か、大坂城とそれをめぐる地形について触れてきた。くりかえし触れるようだが、**大坂というのは一円の低湿地で、そのなかで高燥な土地**といえ、**「上町台」と称せられる南北に細長いナマコ型の地帯**しかない。古代にあってはおそらく岬か島をなし、海をへだてて淡路島とじかに対むかいあっていたにちがいない。その後、淀川や当時その支流であった大和川のはこぶ土砂が堆積して葦の生いしげる低湿地ができ、秀吉の町づくりによってその低湿地に船場という商業地帯ができた。

要するに家康のひきいる数十万の東軍は、そのナマコ型の台地を包囲（ただし海に面した船場のみは開放）して

いるのである。攻め口はことごとく登り坂であった。さらにナマコ型台地についていえば、この台地の北端の鞏固きょうこな岩盤の上に大坂城がそびえ、そのさらに北は大河（淀川下流の天満川）になって落ちこんでいる。この北端の城門が、京橋門である。ついで、ナマコ型台地の南端に古くから四天王寺が位置してきたこともすでにふれた。この攻防戦の場合、幸村が四天王寺とその付近の台上に野外決戦用の主力をあつめたのは、賢明といわねばならない。家康もまたこのナマコ型の南端から攻めざるをえないのである。なぜならばここを陥せばナマコ型台地の背をわずか二キロ北へ駆けることによって、大坂城の南端に達する。大坂城は南端が脆もろい。河その他の天嶮てんけんももたない。秀吉はこれを苦し、南端の弱さを補うための巨大な外堀（清水谷付近）を掘ったが、しかしながらそれも冬ノ陣のあと家康の謀略で埋められてしまっている。要するに東軍にすれば南端の四天王寺付近の城兵をやぶりさえすればよかった。あとは二キロの台上の道を走って城の堀ぎわに達することができるのである。このために天王寺口の決戦に総力をあげた。

家康は、何度か逃げた。これだけの大軍を擁し、しかも勝つ勢いを維持しつつもなおかつ総司令官みずからが身をもって逃げまどうというような例は、古今の戦史にない。「真田幸村が神出鬼没し、そのつど家康は幸村の槍先に追いたてられ、命からがらにげた」という痛烈な伝承は、大坂の町に巷説としてつたえられた。やや誇張があるにしても、骨子は事実にかかい。すくなくとも家康の兵力が大坂方と同数であったと仮定すればかれは惨敗を喫していたことはまちがいないといえるほどに、戦闘は大坂方において華やかであり、東軍において脆弱であった。ただ東軍は多数をたのんでいたにすぎない。「家康はこのとき戦死した。この翌年の元和二年まで生きる家康は替え玉である」とさえ、江戸期の大坂や堺あたりの庶民のあいだでは、一部にそう信じられていた。むろん事実ではない。

家康本営に対する幸村の突撃は二度にわたっておこなわれた。・・・・家康の首を刎はねるべくその本営をめざして決死の肉薄攻撃をこころみたのは真田幸村だけではなかった。毛利勝永も、それをやっている。

<この文書は、「生駒の神話」(下記 URL をクリック) に掲載されているものです。>

<http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/>